

用模倣する事が有るし、また或る時代の流風形式の特徴といふものも、實は地方的に考へて見ると、案外共通點を失つて居ることも屢々認め得られる例であるからである。勿論大體に於てはかゝる特徴は、時代の前後を鑑別する上に於て、第一の手懸りたることを失はないが、少くともかく多少の條件を附して考へて見なければならぬ際に、この千佛洞の壁畫の類に、繪と共に書かれた銘文の存するものゝ少くないことは、一方からいへば或る時代及び地方の美術の形式の特徴を定むる上に役立つものであり、他方からいへば既知の時代的地方の特徴の確實であるか否かを知る試金石と認められる譯である。既にペリオ氏によつて刊行を完成した敦煌千佛洞圖録について見れば、此の方面から得らるべき智識の、決して少くないことを認め得るであらう。例へばその第三集第百三十二圖から百四十九圖に亘つて、ペリオ氏の所謂第七十四洞の壁畫が出て居るが、その中の第百三十三圖には、多數の男女の立像が書かれ、題して大朝大寶于闐國大聖大明天子と記され、此の佛洞の造營に當つて供養した王及びその眷族を書いたものと思はれる。此の繪を紹介したものに、于闐王の供養の様を描いたものであらうと述べたのがある。成程題名の文字通りで間違のない所ではあるが、これは何等時代上の説明を與へてないのは少しく物足りない。或は考へて見れば、その作製の時代について疑はしいと思はれる所があつて、態と何等の説明を與へられてないのかも知れない。しかしながら五代史四裔附録于闐の條を見ると、「晋天福三年(938, A. D.)李聖天爲大寶于闐國王」と記されてある。この李聖天といふ人は、宋の建隆二年(962, A. D.)には尙在位した人であるが、五代の晋の時代より外には于闐が大寶于闐國と稱した證左は無いし、また宋の眞宗の大中祥符年間以後は、于闐の王は皆黑韓王と稱して居る。黑韓といふのは可汗の異譯で、既にこの地方にトルコ族の勢力の及んだことを證明するものである。